

植田麦著『古代日本神話の物語論的研究』

大 館 真 晴

二〇一三年四月、植田麦氏により『古代日本神話の物語論的研究』が上梓された。著者の植田氏は、一九七七年、奈良県に生まれ、二〇〇七年に大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程を修了し、実践女子大学文学部助教を経て、現在、群馬工業高等専門学校に准教授として奉職中である。

本書に含まれる論考は、二〇〇五年から二〇一一年までのもので、本書は植田氏のこれまでの研究成果を集大成したものである。その論考の全体像は、『古事記』（以下、『記』）と『日本書紀』（以下、『紀』）に記載される神話を主対象とするもので、それぞれの作品で、「語り」が物語といかなる関係にあるのかを考察したものである。この「語り」について、氏は序章にて、以下のように述べる。

論者が戦略的に研究の対象として選択するのは、「物語るもの」すなわち「語り」である。ただし、後に述べるとおり、この語りは口頭表現としての意味ではない。表現の方法をいうものとしてある。

以上の植田氏の見解は、本書において一貫する視点で、従来の記紀研究が、氏のいう「物語られたもの」を中心に行われてきたものを、相対化する視点だといえる。著者の浅学ゆえ、植田氏の考察を十分に評しきれたといえない点もあるが、氏の論考を章ごとに要旨を述べ、評してみたい。本書の構成は以下のとおりである。

序章

一 物語論へ

二 古事記の時間表現

三 日本書紀の時間表現

四 古事記の称と名

五 口述と語り・語り手

第一章 古事記の時間表現

第一節 古事記上巻の「天下」

第二節 黄泉比良坂と伊賦夜坂

第三節 古事記における「至今」型形式とその機能

第二章 日本書紀の時間表現

第一節 日本書紀の「今」

第二節 日本書紀の「古」「昔」

第三節 日本書紀の冒頭表現

第三章 古事記の名と称

第一節 古事記における「子」と「御子」

第二節 本牟智和氣御子と品陀和氣命

補論1 「黄泉比良坂」追考

補論2 先代旧事本紀の文末助字

終章

第一章「古事記の時間表現」では、『記』の「今」という時間表現について考察が行われている。氏は、『記』の地の文では「今」の用字例が約三〇例であるのに対して、「昔」の用字例は一例のみで、「古」にいたっては皆無であることに注目する。この用字例の傾向は、氏の言うように、

『記』の書名には「古」があり、『記』の物語世界がイニシエを記すことを主とすることを考えると、特徴的といえる。

第一節は、『記』上巻で、一例のみ記される「天下」の例が考察の中心となる。『記』は、地上世界を語るとき、上巻では、神話的世界を指す「葦原中国」を主として使用する。一方、中・下巻では天皇の統治する世界として「天下」を使用する。そのことから、先の「天下」の用例について研究史は、原資料の残存などとして理解してきた。そこで、氏は『記』の「今」の検討から、新たな見解を導きだした。その見解とは、『記』上巻の「今」は神話世界から切り離された「今」であり、上巻の「天下」の例は〈神話的世界―葦原中国〉と〈現実世界―天下〉という作品構成上の意図によって存在するというものである。この氏の見解は、先の上巻の「天下」の用例について、初めて（著者の管見の限りではあるが）、作品内部の文脈と密接に関わらせて説明した貴重な指摘と言える。

第二節は『記』上巻、伊耶那岐命の黄泉国訪問譚の末尾部分の、「故、其所謂黄泉比良坂者、今、謂出雲国之伊賦夜坂也」について考察を加えたものである。この一文については、従来、黄泉国の世界観や境界性について論じるものが多かった。しかし、氏は「黄泉比良坂が『出雲国之伊賦夜坂』に比定されることは、古事記にとっての意味があ

るはずである」と述べる。このことからわかるように、氏は「今」を含む当該箇所の一文が『記』の文脈上でいかなる機能を果たしているのかという、従来とは異なる視点で論を展開する。そして、結論においては「黄泉比良坂が物語の時間においてかつてあったものであり、また『今』において存する伊賦夜坂と同一のものとする理解が示されることにより、神話世界と現実世界とを連結する」と指摘する。さらに氏は巻末の補論1「『黄泉比良坂』追考」において、近年の黄泉比良坂についての研究史を整理し、黄泉国と葦原中国との位置関係、漢語「黄泉」の解釈、「ヒラ」「サカ」の語義をどのように定めるのが、議論の対象になっていることを指摘する。今後、本書でなされた氏の指摘が、黄泉比良坂の研究の進展により、研究史上で、どのように位置づけられていくのか注目される。

第三節は、『記』に数多く確認できる、「至今」と「於今」の二通りの「今」の語り形式について論究し、その差異と類似性を論じている。注目すべきは、その類似性についての指摘である。氏はこれらの「今」の用法について、火輝命が火遠理命に仕奉する物語が、隼人が天皇に仕える起源譚となっていることなどを例にあげ、物語内の事態と「今」によって語られる事態とは連続しているが、物語の固有の要素が「今」において、より一般性を有し、物語の外部に

において、物語を定位すると指摘する。この氏の見解は『記』がイニシヘを記述するなかでも、「今」を指向していることを指摘し、その特徴的表現方法を詳細に論じた点で評価される。

第二章の第一節と第二節は、『紀』の「今」「昔」「古」という時間表現について考察を行ったものである。『紀』の時間表現は、『記』とは違い、「今」だけでなく、「昔」「古」の用例も数多く確認できる。氏はこれらの表現を物語内部の機能として、ある時点の前後関係を提示する用法と、物語外部に立ち物語を定位するものとに類別する。

そのうえで氏は、『紀』では、語りとしての「今」と、物語としての「古」「昔」は、時間の問題としてだけでなく、空間的にも相対的であると指摘する。そして、そこには、それぞれの事態の傍観者である「世人」と「時人」が置かれていると指摘する。結論的には、『紀』の「今」の「語り」は、物語世界に踏み込まず、事態を傍観する立場をとるものと位置づける。氏は、この用法は漢籍には見出し難いもので、『紀』自らが模索したものと指摘する。そして、その方法は、中古における草子地に近似する語りの機能性をすでに獲得していたと述べる。この注目すべき指摘は、氏の今後の研究の発展を期待するもので、『紀』を直接引用したとされる西海風土記(甲類)などの文献との比較考察が待たれる。

第三節「日本書紀の冒頭表現」は、第一節、第二節の考察で得た成果により、『紀』冒頭部の巻一・第一段正文を考察したものである。氏は「古天地未剖、陰陽不分：」とあり、「古」から語り始められる第一段正文は、前半部と後半部とに別けられ、後半部冒頭において「故曰」と語り出される意味は、冒頭からの天地形成の場面を改めて設定し、神々の生成を語る指標として機能すると述べる。今後はこのような用法が巻二以降においても、どのくらい確認できるのかなど、『紀』全体に視野を拡げた考察が望まれる。

第三章「古事記の名と称」では、『記』が、神や人を示す際、名前で呼称されるか、称で呼称されるかという、その用法を論じたものである。第一節は、『記』に使用される「子」「御子」の全用例を分析したもので、注目すべき見解として、中巻・下巻の系譜部分では、「子」と「御子」の使い分けが厳密に行われており、親が天皇である場合か、親が天皇でない場合でもその子が天皇として即位する場合のみ「御子」が使用され、それ以外は「子」が使用されることが指摘されている。第二節は、「御子」の用法について、二人の人物を取りあげ考察を加えている。その二人の人物とは、垂仁天皇の子である「本牟智和氣御子」と仲哀天皇の子で、後に応神天皇として即位する「品陀和氣命」である。両者とも『記』において、名前で呼称されず「御子」とだけ呼

ばれ続ける、氏も指摘するとおり、これは『記』において特異な表現といえる。植田氏は両者の共通点として、異常な出生と母親の特殊性などを導き出す。

補論2は、『紀』『記』・『古語拾遺』といった文献を切り貼りして再編集された、『先代旧事本紀』の文体が、いかに同一性して保っているかを、文末助字に着目し考察したものである。氏は『先代旧事本紀』において会話文末では「矣」が集中的に用いられていること、地の文では説明的内容の文末に「也」、状況描写の文末に「矣」が用いられていることを指摘する。このことは、氏の「語り」の考察が記紀にとどまるものではないことを示しており、今後の考察を最も期待するところである。

以上、植田氏の論考を紹介してきたが、氏の考察は作品論的立場に立ち、厳密にテキストと向き合い精緻な考察を行うものであった。氏の今後の更なる研究の発展を期待したい。

二〇一四年四月刊A5 241頁

8,500円(本体) 和泉書院

(おおだて まさはる・宮崎県立看護大学准教授)